

氏名(国籍)	金 善 姫 (韓 国)
学位の種類	博 士 (言語学)
学位記番号	博 甲 第 1,448 号
学位授与年月日	平成 8 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	韓国語大 方言の韻律の研究 —音響音声学的観点からの分析—
主 査	筑波大学教授 博士(文学) 湯 澤 質 幸
副 査	筑波大学教授 Ph. D. 原 口 庄 輔
副 査	筑波大学助教授 城 生 伯 太 郎
副 査	茨城キリスト教大学教授 博士(言語学) 島 岡 丘
副 査	元東京外国語大学教授 大 江 孝 男

論 文 の 要 旨

韓国語大邱方言は、ピッチアクセントを有する方言として広く世に知られている。本研究は、この方言を母語とする筆者の内省による問題の絞り込みを出発点として、この方言の音声を visi-pitch にかけて解析し、音響音声学的側面から定量的にその特徴を把握していく。そして、この手法を繰り返し用いながら、最終的には、従来の研究においてはとかく等閑視されがちであった。大邱方言のアクセント、さらにはプロミネンスやイントネーション等の具体的な現象面を総合的に把握・分析し、それに基づいて大邱方言の韻律的特徴の体系化を目指そうとするものである。

全体は7章から構成されており、本文143ページに図版およびデータ88ページを加えた、総ページ数231より成る。

第1章「序論」では、まず先行研究を概観し、併せて本研究の意義について述べている。次いで、本研究において採用された実験器材の特性、および実験方法等について論じている。

第2章「語アクセント」では、1音節語から4音節語までを取り扱っている。また、4音節語を除くすべてに対して、単に音響データによる現象の解析を施すだけでなく、母語話者を被験者とした聴取実験をも併用して、分析結果の裏づけをもとっている。その結果、持続時間長に関する従来の学説に対して、新しい説を提出している。すなわち、子音そのものの音響特性や音声学的音節における位置的条件などを仔細に解析することにより、大邱方言アクセントにおける母音の長さは中核的なものでないと結論づけている。また一方、ピッチ情報は、この方言における不可欠要素であることが、実験結果によって立証できると主張している。

以上の結果、単語レベルのアクセントは、

1音節語：(1)上昇〔↓〕, (2)高平〔↑〕, (3)低平〔↓〕

2音節語：(1)昇高〔↓↑〕, (2)昇低〔↓↓〕, (3)低高〔↑↑〕, (4)高低〔↑↓〕, (5)高高〔↑↑〕

3音節語：(1)高高低〔↑↑↓〕, (2)高中低〔↑↑↓〕, (3)昇高低〔↓↑↓〕, (4)低中高〔↓↑↑〕, (5)低高低〔↓↑↓〕

4音節語：低中高低〔↓↑↑↓〕

に分類でき、さらに大きくは、①高くはじまるもの(高起)、②低くはじまるもの(低起)、③上昇調ではじまるもの(昇起)の三類に集約しようと主張している。

第3章「複合語アクセント」では、従来、実験音声学的方法ではほとんど扱われていなかった複合語アクセントの分野に視点を転じている。一見、非常に複雑多岐にわたるかに思われる現象に対して、筆者は単語レベルで得られた知見を援用して、基本的にこれらも①高起、②低起、③昇起、の三類に分類しうることを主張し、さらに

(1)「昇起」では音節数が増加することによって、「高起」に合流する傾向が生じること

(2)「昇起」は語頭にしか現れないという制約があるため、複合語の後部要素に立つと一律に「高」音調に変わること

など、注目すべきことを述べている。そして、それによって、音節数との関係からアクセント・パターンを予測することができることを明らかにしている。すなわち、前部要素をX、後部要素をYとした場合、 $X \geq Y$ のとき複合語のアクセントはXに従い、また $Y > X$ のときはYに従うということを論じている。

第4章「語アクセントの音韻解釈」では、自律分節理論の枠組みに従って分析を行い、

(1)基本音調メロディーは、HLとLHLであること

(2)「昇起」は基本的に「高起」と解釈することができるので、音調の基本的なパターンは、①高起、②低起、の2種類に集約できること

などを明らかにしている。

第5章「文中における語音調の変異」では、これまでの各章にわたって考察してきた単語アクセントが、イントネーションの影響下において、どのようなピッチシフトをこうむるのかを試験的かつ定量的に捉えた研究が行なわれている。すなわち、平叙文と疑問文について検討を加えた結果、

(1)当該単語アクセントの型

(2)文中における生起位置

(3)前後に位置する単語アクセントの型

などが、文音調に固有のピッチ・パターンと複雑に絡み合って具現化しているということを立証している。そして、ここから、それらのうちで最も筆者が興味を覚えたという、先行子音の特性によって著しく影響を受ける後続母音のピッチ・シフトに関する、詳細な実験・観察を主軸とする見解が述べられている。なお、これは次章に直接つながって行く。

第6章「音韻形状のヴェリエーションの要因」では、前章を受けて、まず、

(1)閉鎖音と破擦音の直後では激音と濃音が最も高く後続母音のピッチを上げること、次いで、摩擦音+母音、閉鎖および破擦音+平音の順に後続母音のピッチを上げること

を、定量的に明らかにしている。また、

(2)句構造の違いによりアクセント単位が構成されること、さらには同一単位内ではアクセント sandhi が生じること

(3)プロミネンスがかかった場合でも、単語固有のアクセント型は、文中における位置とは無関係に保持されること

(4)当該単語を囲む、前後に位置する語のアクセント型の配列を詳細に分析することによって、ある程度はピッチの量的変化パターンとしての「音域」が予測できること、さらにこのことは、日本語の分析などを通して確認されている“catathesis”にも通じる現象であること

(5)大邱方言の文音調が、後部に行くに従って緩やかにピッチ下降を遂げる、いわゆる“declination”を有するところから、同一の語であっても、文中においてその占める位置によりピッチの絶対量が異なること

などを明らかにしている。

第7章「結論」では、以上の総括と、今後の展望とを述べている。

審 査 の 要 旨

韓国語大邱方言のアクセントに関しては、これまでも諸家により数々の考察が加えられてきた。しかしながら、かつてこの論文ほど音声的事実を器械実験によって仔細かつ徹底的に観察した例はない。その意味において、本論文は斯学にとってのまさにパイオニア的性格を有する。一方、本論文は単なる音響至上主義に陥ることなく、事実をあくまでも言語学的枠組みの中で捉えようとしている。従って、時に応じて音韻論的側面からも考察を加えている。ここに、筆者のなみなみならぬ意欲が汲み取れる。

研究成果の第一は、何とんでも大邱方言のアクセント体系を、(1)高起、(2)低起、(3)昇起、の3類に整しえた点である。これは、これまでの論争にひとつの明確な解答を示したことにほかならず、高く評価される。第二は、文中におけるさまざまなピッチ・シフトを与える要因について、犀利な実験を通して少なからずの新しい音声的事実を指摘するとともに、それらに対して言語学的な説明を与えたことである。とりわけ直前に立つ子音の特性が母音のピッチに与える影響に関して、(1)閉鎖音と破擦音の激音と濃音、(2)摩擦音、(3)閉鎖音と破擦音の平音、という順位のあることを定量的に立証した点が光っている。

しかしながら、その一方で、まだ粗削りな側面のあることも否めない。例えば、音響実験に関する方法論的問題点として、子音セグメントによる後続母音への影響を指摘しておきながら、実験機材を visi-pitch 中心に選択したという点は頷けない。sound spectrograph および CSL による分析結果を十分に生かすきれなかったことが惜しまれる。また、自立分節理論による音韻分析をしておきながら、それがいわゆる基本形のみに終始し、形態的变化に関しては何ら注意が払われていない点も、今後に残している。

以上、今後追究すべき問題は残されている。しかしながら、既に述べたように、本論文の韓国語研究に対する貢献度には見るべきものがあり、また、まだ若くしかも研究能力に恵まれた筆者には、将来においてそれらの問題を克服するだけの力が十分あるものと確信される。

よって、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。